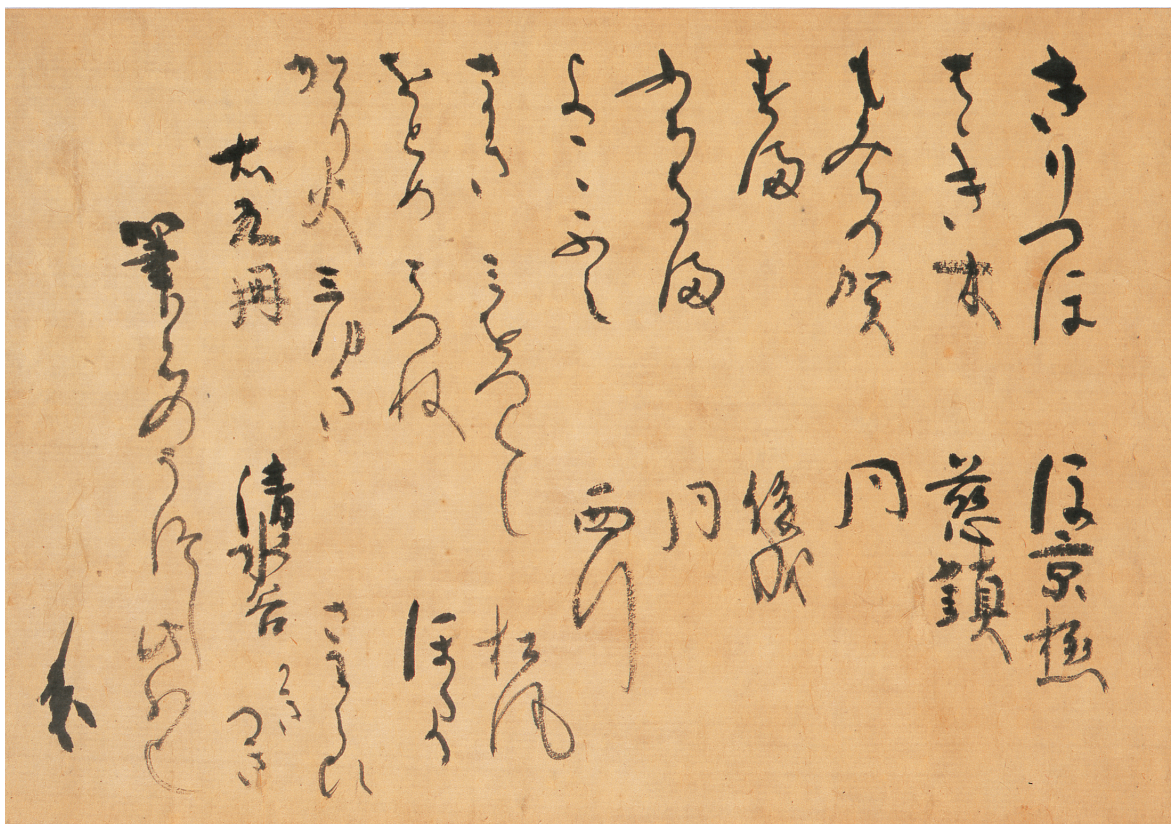


蓬 右



近衛信尹筆
「河内本源氏物語筆者目録」

解讀

きりつほ 後京極

は、き木
慈鎮

もみちの賀 同

すま 俊成

ふちはかま 同

よこふえ
西行

さかき
ミをつくし
松風

をとめ
はつね
ほたる

かゝり火
ミゆき
さわらひ

右九冊
清水谷 かきつき

筆者のうつし此分也

（近衛信尹花押）

名古屋市蓬左文庫

HÔSA LIBRARY CITY OF NAGOYA

秋季特別展

歌仙 — 王朝歌人への憧れ —

「やまと歌は、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける」と『古今和歌集』仮名序にあるように、和歌を詠むことは、日本人にとって自らの心を伝え、人との間をつなぐ重要な行為でした。必須の教養とされ、公私にわたり和歌を詠むことが求められるなかで、古来のすぐれた歌詠みは尊崇の対象となり、「歌仙」と呼ばれました。

柿本人麿や紀貫之をはじめとする歌仙は、『古今和歌集』仮名序に取り上げられた六歌仙、藤原公任の『三十六人撰』に基づく三十六歌仙など様々な取り合わせで親しまれました。

歌仙を和歌・略伝とともに絵姿であらわした「似絵」の流行のなかで開花しました。後世の平安時代末期よりはじまり、鎌倉時代には「似絵」の流行のなかで開花しました。後世の人々が抱いた王朝歌人への憧憬の中で、歌仙絵はやまと絵の主要な画題となり、室町時代以降、絵巻や屏風・扁額など、種々の形態で描き継がれていきました。十七世紀には、古典復興の気運の中で武家や上層町衆へと受容層を拡げ、歌仙絵は一層、多様化していきました。

蓬左文庫展示室では、十七

世紀の古典復興に焦点を当てます。『三十六人家集』に代表される三十六歌仙にまつわる歌書や、当時の絵師たちによる、中世の歌仙絵からの学習をうかがえる作品などから、古典享受の様相をご覧いただきます。また、十七世紀以降に豊かな多様性を見せた歌仙絵の展開を象徴する作品もご紹介いたします。



十二類歌合絵 狩野氏信筆（場面替あり）
江戸時代 17世紀 個人蔵

室町時代の御伽草子『十二類絵詞』から、8月15日の月夜に歌合を行った十二支の動物たちを扇面に描いている。歌仙絵よろしく、擬人化された動物たちがその特性や故事から連想される衣装や道具とともに、個性豊かにあらわされている。



重要文化財 佐竹本三十六歌仙絵 藤原仲文 鎌倉時代 13世紀 北村美術館蔵 展示期間：10/16～11/4

京都・下鴨神社から秋田・久保田藩佐竹家に伝来した「佐竹本」は、数ある歌仙絵のうちでも成立時期は鎌倉時代中期に遡り、また近代まで絵巻の姿で伝えられた点においても、歌仙絵の展開を知る上で極めて貴重な作品である。大正8年(1919)、歌人ごとに分割され、諸家の所蔵するところとなった。

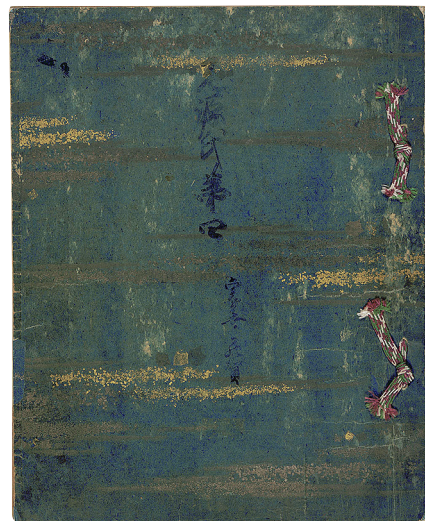
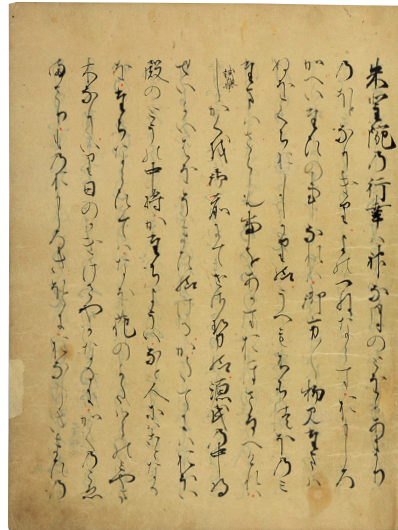
展示室1・2

「河内本源氏物語」全巻カラー影印完結記念 源氏物語の世界

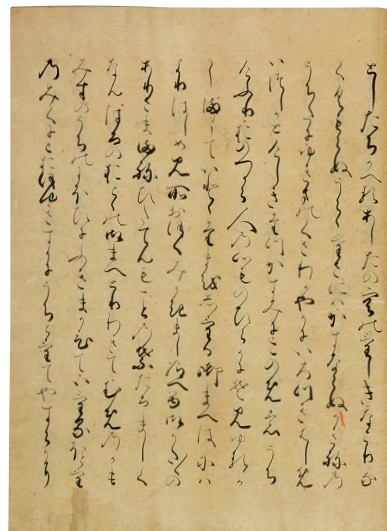
千年前、十一世紀初頭に成立した『源氏物語』は、現在に至るまで愛読され続けている「古典の中の古典」であり、日本文学史上最高の傑作と賞賛される恋愛長編小説です。文学に限らず、絵画・工芸・音楽・演劇など様々な分野に影響を与え、多くの芸術作品が生まれています。

紫式部が書いた原本は早くに失われましたが、『源氏物語』は多くの写本が製作され、現在に伝えられています。写本には、藤原定家が校訂した「青表紙本」の系統と源光行・親行親子が校訂した「河内本」の系統があります。蓬左文庫には、「尾州家本」と呼ばれ、「河内本」系統の中でも最も重要とされてきた『源氏物語』が伝来しています。

本年十二月、この尾張徳川家伝来の「河内本源氏物語」の全巻カラー影印版刊行が完結いたします。これを記念して、時代を超えて愛され、文学・絵画・工芸・演劇など、様々な形で享受されてきた『源氏物語』の世界を紹介するとともに、重要文化財「河内本源氏物語」の全巻を一堂に会し公開いたします。



「紅葉賀」
表紙と巻頭



「初音」
表紙(後補)
と巻頭

重要文化財 河内本源氏物語 全23冊 鎌倉時代 正嘉2年(1258) 北条実時奥書

本書は、巻ごとに筆者が異なる寄合書で、十数人の名筆家の手になる写本である。表紙についても製作年代の異なる2種類がある。54巻の内、13巻は火災などの損傷により後に補われたためという説が有力である。

『尾州家河内本源氏物語』についてーその成立と本文改訂の実態ー

〔日時〕十一月三十日(土)午後二時から
〔申込み〕往復はがきに住所・氏名、電話番号、参加人数を記入の上蓬左文庫「源氏物語係宛」(定員)一五〇名(締め切り)十一月十日(日) 申込み多数の場合は抽選
〔会場〕徳川美術館講堂
〔講師〕岡嶋偉久子 天理図書館稀書目録室長

カラー版「尾州家河内本源氏物語」完結記念講演会

〔講師〕岡嶋偉久子 天理図書館稀書目録室長

展示室1

旅をつづる

情報が少なく交通手段が未発達だった時代から、日本人は旅のありさまを文字に書き残してきました。公務や放浪、巡礼など、旅の動機はさまざまですが、人々は異郷を巡り目に触れた珍しい風景や風俗を、文章や詩歌のかたちに残して伝えました。とりわけ領国と江戸を往復する参勤交代が重要な公務であった江戸時代の大名にとって、旅は身近な存在でした。紀行文や旅日記など、旅の様子を伝える文芸作品を中心に紹介します。



岐阜の道しるべ 知多の枝折 夏の日国に帰の記
徳川斉荘筆 江戸時代 19世紀 徳川美術館蔵

尾張家12代^{なり たか}斉荘(1810~45)による自筆の紀行文。「夏の日国に帰の記」は、斉荘が天保14年(1843)6月15日に江戸を出発し、同25日に名古屋に着くまでの様子を、紀貫之『土佐日記』に擬して記した和歌まじりの紀行文。「岐阜の道しるべ」と「知多の枝折」は、この滞在中に領内を訪問した際の紀行文である。

展示室2

名所図会の世界

江戸時代の尾張の景観を知ろうとすると、必ず参照されるのが『^{めいしょくわい}尾張名所図会』という本です。野口道直^{のぐちちなお}、小田切春江^{おだぎりしゅんこう}ら尾張の文人が総力を挙げてまとめたこの本は、正確な鳥瞰図と詳しい解説によって、尾張の名所を余すところ無く描いています。

『尾張名所図会』のような「名所図会」と呼ばれるタイプの本は、安永九年(一七八〇)刊行の『都名所図会』に始まり、十九世紀を通じて流行しました。「名所」を描いた挿絵(図)を集め(会)、そこに解説を加えたものが「名所図会」の基本パターンです。「名所図会」は江戸時代後期の旅ブームを背景に、各地で次々と刊行されました。

この展示では、蓬左文庫の所蔵する各地の「名所図会」によって、およそ二〇〇年前の景観をたどるとともに、『尾張名所図会』編さんに関わる資料を紹介し、「名所図会」編さんの裏側を探ります。



野口道直六十宴之図并賛 小田切春江筆
江戸時代 天保15年(1844)
名古屋市博物館蔵

『尾張名所図会』前編の刊行と、野口道直の還暦を祝った宴の席の様子。筆を執っている小田切春江のまわりに、深田精一や野口道直など、『尾張名所図会』編さんに関わった人々が集まっている。

展示室1

ひなの世界

三月三日の桃の節供にちなみ、毎年徳川美術館の本館展示室で開催される「尾張徳川家の雛まつり」にあわせて、蓬左文庫の展示室でもお雛様を展示します。享保雛や古今雛など、江戸時代から昭和に至るまでの町屋に伝えられた様々なお人形を紹介します。大名家・尾張徳川家に伝えられた豪華で格式のある雛とは趣きがことなり、素朴ななかに身近で親しみを感じさせてくれる「桃の節供」の世界をお楽しみ下さい。



御殿雛飾り 志村家寄贈 明治時代 19世紀 徳川美術館蔵

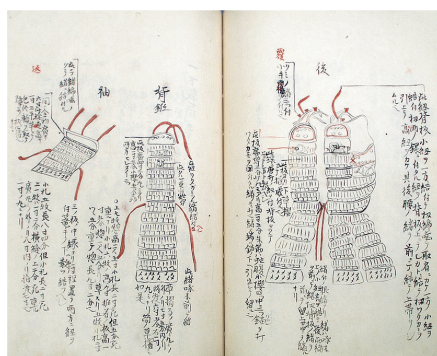
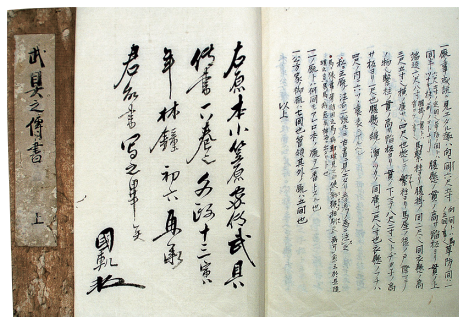
昨年度徳川美術館に御寄贈いただいた御殿雛飾り一式。志村家は、江戸時代から近年まで京都市内で造り酒屋を営んできた旧家である。男雛・女雛は、京人形の老舗・丸平大木人形店の雛人形で、箱には明治23年(1890)の商標が貼られている。御殿は畳一畳からはみ出すほどの大きさで、細部にもこだわった本格的な造りとなっている。

展示室2

大名家の礼法 — 小笠原家伝書 —

朝岡家は尾張徳川家の婚礼・元服などの御用係を務め、故実礼法を家職として代々尾張藩に仕えた家です。九代藩主宗睦(一七三二～九九)は、朝岡家五代国輔に対し、幕府の礼法小笠原流を学ぶよう命じました。安永九年(一七八〇)、国輔は嫡子国雄を伴って、江戸の小笠原平兵衛家に入門し、以来代々の当主と嫡子は、江戸の小笠原家に学び、小笠原流の伝書を書写して持ち帰ったのです。

昭和四十三年(一九六八)、朝岡家の御子孫から同家に伝来した文書や書籍五百点余が蓬左文庫に寄贈されました。今回は、朝岡家に伝来した小笠原流の伝書を中心に大名家の礼法的一端を紹介します。



武具之伝書 国軌筆 江戸時代 文政13年(1830)

甲冑の着用方など武具にかかわる約束事の伝書。本書巻末には「承君命書写者也」とある。ほとんどの伝書に同様な表現で主君の命令による書写であることが記されている。

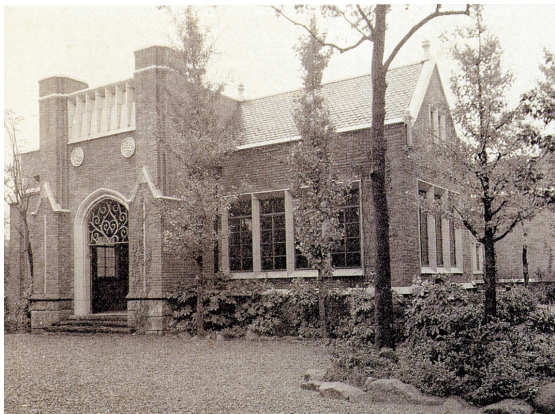
徳川園に大須文庫？

―幻の大須文庫移転案をめぐって―

蓬左文庫と大須文庫

筆者はこの春、名古屋博物館から蓬左文庫へ異動になった。よく知られるとおり、蓬左文庫は尾張徳川家の御文庫を起源とし、昭和十年（一九三五）に同家十九代当主の徳川義親（よしちか）によって設立（当初は東京目白）された長い歴史をもっている。異動を聞いたとき、このような歴史ある文庫の学芸員が務まるのか、一抹の不安を覚えたが、一方で思わぬ因縁のようなものも感じていた。

というのも、筆者は昨年十二月、名古屋博物館で開催された「大須観音展」という展覧会を担当し、中区の大須観音（真福寺宝生院）にある大須文庫（真福寺文庫）の古籍に触れる機会を得ていたからだ。大須文庫は中世以来、大須観音に伝わる仏教・神道関係の典籍を所蔵する文庫で、現存最古の古事記写本として知られる国宝「古事記」をはじめ、多くの貴重な古籍を所蔵している。蓬左文庫が日本有数の大名家による文庫だとすれば、大須文庫は日本有数の寺院文庫であると言える。つまり筆者は短期間の内に、両文庫の所蔵する古籍に親しく触れる機会を得たわけで、一学芸員として大変な幸運というべきであろう。



設立当時の蓬左文庫（昭和10年 東京目白）
『蓬左文庫要覧』（昭和10年刊）より

江戸時代の大須文庫と尾張藩

さて、二つの文庫の関係は、単に名古屋にある日本有数の古籍の宝庫というだけではない。江戸時代には尾張藩士の稲葉通邦（いなばみちくに）が、九代藩主宗睦（むねむち）の命を受けて大須文庫本「古事記」の綿密な調査を行い、その書写年代を特定している。このとき稲葉が書写した大須本「古事記」の写本は、今も蓬左文庫に伝わっている。また、文政年間（一八一八～三〇）には神社奉行所が大須文庫の調査を行い、目録を作るとともに蔵書の修復も行った。大須文庫の蔵書にはほぼすべて、このとき捺された神社奉行所の印が見られる。このように、尾張藩は積極的に大須文庫の調査・保護に努め、その痕跡が蓬左文庫と大須文庫の双方に残されているのである。

昭和の大須文庫整備と移転案

以上のように、大須文庫は江戸時代には藩の庇護を得て調査・保存が行われたが、明治になると藩の後ろ盾が失われ、大須観音自身も多くの寺領を失ったため、文庫の維持管理は困難になった。明治二十五年（一八九二）に伽藍を焼き尽くす大火に見舞われた時には、文庫への延焼こそ免れたものの、繁華街のなかにある危険性があらわになった。明治三十年代以降には「古事記」など蔵書の一部が国宝に指定され文庫への関心も高まったが、大正時代に至っても大規模な保護事業は行われず、書庫の老朽化と蔵書の傷みは深刻化していた。

昭和四年（一九二九）、こうした状況に危機感を抱いた住職の大槻快尊（おつきせいそん）は、東京帝国大学教授の歴史学者・黒板勝美（くろいたかつみ）を招いて蔵書の調査と文庫の新築に着手し、昭和七年には県知事を会長に、市長を副会長に据えて文庫再建会が設立された。

大須観音に残された再建会の記録を見ると、このとき興味深い提案があったことがわかる。それは大須文庫のような古籍の宝庫が繁華街のなかにあるのは危険だから、どこか安全な場所に移転してはどうか、というものであった。当時、大須周辺では商店街の近代化を目指した都市計画が進められており、大須観音境内の整備も行われていた。こうしたなかで、ますます発展する「盛り場」大須から文化財を避難させようというのが、この移転

案の骨子であった。

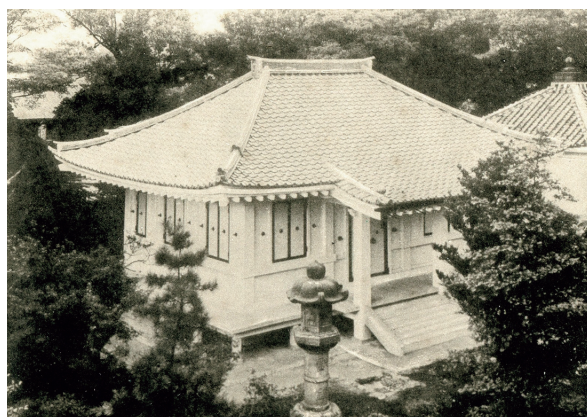
徳川園に大須文庫を移転？

実はこのとき、大須文庫の移転先として鶴舞公園とともに名前が挙がったのが徳川園であった。なぜこの二ヶ所が移転先として提案されたのだろうか。その背景を探るために、この時期の名古屋市全体の文化的な環境に視野を広げてみたい。

まず、大正十二年（一九二三）には鶴舞公園内に市立図書館が建設されている。ここには旧家の蔵書や、大正時代発刊の『名古屋市史』編さん資料などが収められた。昭和五年には名古屋城が宮内省から名古屋市に下賜され、翌六年には天守の公開が始まった。同じ年、尾張徳川家大曾根邸の大部分が名古屋市に寄贈され、翌七年に「徳川園」として一般公開された。昭和十年には園内に徳川美術館が開館している。こうしてみると、短い期間に現代につながる名古屋の文化施設が一挙に整備されていたことがわかる。

こうした一連の動向は、政府や華族が文化財保護や財産の維持に苦心して、それらの整理・再編を進める一方、都市の発展とともに力を付けた大都市自治体が文化行政の充実を目指し、その受け皿となることで生じたものであったといえる。徳川園の場合は、地域文化の発展を考慮した義親の見識によるところも大きい。

大須文庫を鶴舞公園か徳川園に移転しようとい



新築された大須文庫（昭和12年）

『大須真福寺文庫再建并典籍整理梗概』（昭和12年刊）より

う案も、こうした動きの一環と考えるべきではないだろうか。つまりそこには、単に火災の危険から文化財を守るだけでなく、大須文庫を市の文化行政に組み込む狙いがあったと思われる。

幻となった移転案

ところが、こうした移転案は強力な反対に直面した。反対の急先鋒は文庫調査を指導する黒板勝美であった。黒板はつねづね文化財の現地保存を主張しており、歴代住職が苦心して収集保存に努めてきた文庫を他の場所に移転するなど、もつてのほかと断じたのである。これによって移転案はあえなく撤回となった。

帝大教授の権威もさることながら、黒板の綿密な計画にも着目する必要がある。移転案は火災の危険性を指摘していたが、黒板は旧知の建築家、大江新太郎（おしんたろう）を招いて鉄筋コンクリート耐火建築による文庫新築計画を早くから打ち出していた。大江は醍醐寺や高野山でも黒板とともに宝物館建築に携わっており、この分野の権威とされていた。実際、このとき建てられた文庫は名古屋空襲の猛火を耐え抜き、貴重な古典籍を守ったのだから、黒板の自信にもそれなりの裏付けがあったと言わねばならない。

現代につづく課題

結局、戦後になって蓬左文庫が東京目白から徳川園内に移転して名古屋市に移管される一方、大須文庫は大須観音境内で、寺院自らの手によって管理されるという現在のかたちに収まった。二つの文庫の来歴を振り返ると、名古屋の文化施設がどのように整備されてきたのかがよくわかり、そこに携わった人々や、交わされた議論から学ぶことも多くあるのではないかと感じる。

現代においても、貴重な文化遺産をどのようなかたちで守り伝え、活用の道を開くのかは、ますます大きな課題となっている。課題の大きさに比べて、筆者の力は微々たるものかもしれないが、微力ながらもこの課題に取り組みたいと思う。

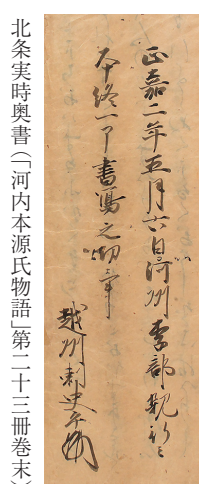
近衛信尹筆 河内本源氏物語筆者目録

「河内本源氏物語」の付属として尾張徳川家に伝来した近衛信尹(このえのふただ) (一五六五～一六一四)自筆の「極」つまり筆跡鑑定書である。「河内本源氏物語」は、寄合書とよばれる各巻ごとに異なる複数の筆者による写本である。現在では三十人以上の筆者によるとされている。この「極」で、信尹は、五十四巻の内、十五巻について筆者を挙げた。挙げられた著名な人物の真偽はさておき、書風、想定される書写年代については現在の研究成果とも矛盾しない内容である。

近衛信尹は、近世初期、安土桃山期を代表する文化人の一人である。三藐院と号し、書・和歌・連歌・絵画・音曲等に優れ、特に書は一派をなすほどで、本阿弥光悦、松花堂昭乗とともに寛永の三筆と称せられた。生来、才気煥発、直情奔放な性格はその独特な書風にも顕れている。慶長十年(一六〇五)、近衛家十七代として関白となるが、少年期・青年期から、信長・秀吉・家康等時代を動かした大名たちと政治的にも文化的にも関わりを持った。

「河内本源氏物語」は、金沢文庫を創設した北条実時(ほうちょうじつとき) (一二二四～七六)がその成立にかかわり、所蔵した写本である。実時の死後、実時の妻もしくは娘の所蔵となり、その後足利將軍家の所蔵となった。十五世紀後半まで同家の所蔵であったことが記録によって確認できるが、この後、尾張家初代義直の蔵書目録に記載されるまで約一世紀の空白を埋める記録はない。唯一この間をつなぐのが信尹の筆者目録である。

当代を代表する文化人近衛信尹が、「極」をつけるに値する所蔵者はだれなのか。当時古筆収集に熱心であった豊臣秀次(一五六八～九五)の存在が想起され、秀次から豊臣家へ、同家から家康をへて義直のもとへとという流れが想定され、定説となってきた。権力とともに受け継がれた「河内本源氏物語」の華麗な遍歴は、この目録によって補強され、創られたともいえるのである。



北条実時奥書(河内本源氏物語「第二十三巻末」)

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174
ホームページ <http://housa.city.nagoya.jp/> / 〈蔵書検索もできます〉

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【なごや観光ルートバス「メーグル」】名古屋駅前8番のりば名古屋駅発着で平日30～1時間に1本、土・日・休日は20分～30分に1本運行

【市バス】名古屋駅前2番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

【名鉄バス】名鉄バスセンター3F 4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【JR】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車3番出口より徒歩15分 桜通線「野並」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル(オアシス21)3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場(有料 30分 120円)をご利用下さい。

ご利用案内

■休館日／月曜日(祝日のときは直後の平日)

12月16日(月)～1月3日(金)特別整理、年末年始休館 3月3日(月)は展示室のみ臨時開館します。

■展示室／有料 一般：1200円 高大生：700円 小中生：500円(蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧)

【開室時間】午前10時～午後5時(入室は午後4時30分まで)

■閲覧室／無料・館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時 午後1時～午後5時 【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

